

2022年1月16日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書3章1～6節

説教題：憐れみの信仰

以前、「百万人の福音」に「怒り」についての記事がありました。ある人が運転中に車の中で家族と口論になり、怒りのあまり車のギアをいきなり「ドライブ」から「パーキング」に替えて、車が壊れて、修理にかなりのお金がかかった、ということでした。こういう記事を読むと、私は慰められます。私も、かつて、怒りのあまりハンドルを思い切り叩いて、その途端、メーターがバチバチと光って、車が停まってしまったことがあります。怒り易い自分の性格に悩むのですが、その同じ記事の中に「怒りには美点がある」とも書いてありました。「『つくり笑い』は出来ても『つくり怒り』は難しい」というのです。怒りにはその人の正直な心が現れるということでしょう。「怒り」が正直な心を語っているとすれば、私達は、誰かの怒りを通して、その人の心の中にあるものに思いを至らせることが出来る、ということではないでしょうか。

今日の箇所「2つの怒り」が記されています。特に注目したいのは、イエス様が怒っておられることです。もちろん、私達の怒りとは全く違うものと思いますが、今朝は、イエス様の怒りに思いを向けることによって信仰の学びをして行きたいと思います。2つのことを申し上げます。

### 1. 内容：主イエスの怒りに込められた思い

申しあげたように、ここに2つの「怒り」があります。終わりの6節には「パリサイ人たちは出て行って…ヘロデ党の者たちといっしょになって、イエスをどうして葬り去ろうかと相談を始めた」とあります。「殺したい」と思うほどにイエスを疎ましく思ったのです。ここに「怒り」があります。「パリサイ人」というのは、「神の民ユダヤ人に与えられている『律法』を守ることに命をかけていた人々」です。「ユダヤ至上主義者—(国粋主義者)」です。彼らは、イエスが彼らの信仰に逆らっていると、彼らの働きを妨げていると、思ったのです。一方「ヘロデ党」というのは、おそらく当時のガリラヤ領主ヘロデ・アンティパスに仕えていた人々です。彼らはヘロデ王の政治の安寧を願っていました。だから、少しでも社会の不安の材料になりそうな者は潰す必要を感じていたのでしょう。イエスにその危険を見たのです。そこで利害が一致します。しかしヘロデ王は、ローマ帝国の権力と結びつくことでガリラヤの領主の立場を得ていた人です。ヘロデに仕える人々も、盛んにローマ人との交わりを持っていました。国粋主義者であるパリサイ人にとって、ローマの権力におもねり、ローマ人と盛んに交わっているヘロデ党のような輩は、軽蔑すべき人々だったのです。そのパリサイ人が、ここでヘロデ党と手を組むのです。それほどイエスを殺したかった。それほどにイエスに「怒り」を覚えたのです。

もともとの問題は、イエス様が会堂で「片手のなえた人」の手を癒したことです。しかし「人を癒すこと」は、「安息日—(金曜日の日没から土曜日の日没)—に仕事をしてはいけない」という「律法」に抵触したのです。「律法」というのは、ユダヤの人々の生活を規定していた決まりです。本来は「神が与えたもの」ということで「人間が作った法律」と区別して「律法」と言ったのです。しかし「律法に抵触した」と言っても、それは、「神の律法」ではない、「律法学者」と呼ばれる人々が後に作り上げた「律法の細則」に抵触したということです。本来の「律法」にはなかった細々とした決りです。「安息日」に関するだけでも1500の細則があったと言われます—(234という説もあります)。そうすると重荷以外の何ものでもありません。しかし「律法の番人」を自任する彼らは、イエスの業を見過ごすことは出来なかったのです。(ここにはエルサレムの最高議会からイエスを見張るように派遣されていた人達もいたかも知れません)。もちろんパリサイ人も「何が何でも安息日に人が癒されるのはダメ」とは言いませんでした。命の危険がある場合、緊急の場合に、応急処置程度の手当てをすることは認めていました。しかし問題は「イエスが癒されたこの人の場合は緊急の状態

はなかった」ということです。教会の伝承では、この人は「左官(石工)」でした。レンガを積んだり、石を組んだりして、仕事をしていました。ある日、仕事に重いものを扱ってケガをしたのかも知れませんが、何かの病気だったかも知れません。いずれにしても、それが利き腕であれば、生活に差し障りが生じます。それでも命の危険はなかった。日が暮れば、「安息日」は終わるのです。イエス様は、何時間か待って、「安息日」が終わってから癒しをされても良かったのです。しかしそうはされませんでした。敢えて挑戦しておられる感じでした。それが彼らの「怒り」を呼ぶのです。彼らの「怒り」は何を現しているのでしょうか。

ある人が言いました。「怒る者の心を支えているのは正義感である。『自分が間違っている』と思っただけで怒り狂い、殺意まで抱くことはない。『自分が正しい』と思うからこそ怒る、あるいは、それが私達の怒りを支えて行く」というのです。パリサイ人にしてみれば「イエスこそが悪い。我々が怒っているのは当然だし、正しい」のです。しかし三浦綾子さんは言っています。「自分は正しい、自分は偉い、自分は良い人間だと、自己を絶対化していることはいやらしさ、それが我々なのだ」(三浦綾子)。ただでさえそうだとすれば、一生懸命やっている時は余計にそうなのではないでしょうか。自分が正しいと思う。そうすると他の人を裁きたくなる。パリサイ派の人々は、命がけでやっています。記録によれば「ある時など、戦争中でも安息日を守るために戦わなかった」というのです。その伝統に立っていますから、「律法破りに対する批判」も激しいのです。しかし、彼らは本当に正しいのでしょうか。本当にそれが神の御心を行なうことだったのでしょうか。何かを見失っているのではないのでしょうか。

ここにもう1つの「怒り」があります。イエス様の怒りです。イエス様はなぜ、「問題が起こる」と分かっているながら、安息日が終わるまで待たれなかったのでしょうか。それどころか、敢えて挑戦的なことをなされたのでしょうか。イエス様は、手の萎えた人に「立って、真中に出なさい」(3)と言われます。会堂では、皆が床に座っていましたから、真中に立つというのは誰の目にも見えるような形にすることです。つまりイエス様は人々の心に訴えておられるのです。イエス様は言われます。「安息日にしてよいのは、善を行なうことなのか、それとも悪を行なうことなのか。いのちを救うことなのか、それとも殺すことなのか」(4)。誰が考えても「人を癒すこと—(手の萎えている人を癒すこと)」は基本的に「善を行なうこと」です。「ヤコブ書」は言います。「人がなすべき善を知りながら、それを行わないのは、その人にとって罪です」(ヤコブ 4:17)。だから「助ける者もない人を見捨てて放置しておくこと」は「悪を行なうこと」です。どちらが本当に神の御心に適っているのか。でも、彼らには見えないのです。

大事なことは何でしょうか。それは、ここに病のために辛い思いをしている人がいる。その人の存在、その苦悩の現実をどう捉えるか、ということではないでしょうか。1人の人の人生、人格、人間の尊厳、その大切にされるべきものが大切にされていない、そのことをどう思うかということです。

この人は、手が萎えてしまっただけでも会堂に来て神を礼拝していたのです。しかし彼は、どんな思いでここにいたのでしょうか。辛い思いをしながら隅っこに座っていたのではないのでしょうか。語られる祝福の言葉を複雑な思いで聞いていたのではないのでしょうか。神の前に出て、自分の悩みを訴え続けながら「この悩みを誰が受け止めてくれるのか」、そういう思いを持ちながら座っていたことでしょうか。しかし人々は、パリサイ人は、どのような思いでこの人を見ていたのか。「あんなにふうになったのは、あの人が悪いからだ」と思ったり、「私の知ったことじゃない」と思う人もいたかも知れません。安息日に一緒に神の前に出ていながら、自分の隣にこの人がいるのに、この人を本気になって心配する人、神に執り成す人がいなかったのです。あるのは、「イエスがこの男を癒すかどうか」、その好奇心だけです。しかも「安息日には癒されるべきでない」と思っているのです。イエス様は、その彼らの頑なさを嘆き、悲しみ、あるいは怒り、そして「神の御心を思いなさい」と彼らの良心に訴えておられるのです。

「神の御心」とは何か。「マタイ福音書」の並行箇所には、この記事の後半に「イザヤ書」の御言葉が引用されています。「彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない、公義を勝利に導くまでは」(20)。「いたんだ葦を折ることもなく」、それは「いたんだ葦を折るのではなく、却って強め」ということで、「くすぶる燈心を消すこともない」、それは「くすぶる燈心を消すどころか、炎をもっと強くする」という意味の言葉です。それが、神の御心だと述べられています。イエスがここで訴えておられるのは、「人を生かす」という神の御心なのです。神の御心は、そこにいるその人の存在、その人の命、その人の尊厳、それを大切にして、生かして行く正義なのです。それが安息日の本来の意味です。しかしこの人々は、それを忘れていたのです。彼らは「かたくな」(6)でした。「かたくな」とは、「頑固でまちがっていること」、「心を閉ざしていること」、「心が強情で愚かなこと」、「心が死んでいること」、英語の聖書は色々に訳しているようですが、いずれにしても、人の悲しみを顧みず、律法の冷たい正義を振りかざして人の心を殺している、人の望みを奪っている、そのことにイエス様は挑戦しておられるのです。

## 2. 適用：主イエスの御心を受けて

私達は、イエス様の「怒り」から何を教えられるのでしょうか。私は、ある方の言葉を思い出しました。ある教会で、ある会議の席上、話し合いが紛糾したことがありました。その時、1人の方が立ち上がり、声を震わせながら言われました。「キリスト教とは隣れみです!」。「キリスト教信仰とは、自分も神に隣れみを受けている者として、隣人にも神の隣れみをもって接すること、そこに帰らなければならないのだ」と仰ったのだと思います。イエスは、パリサイ人の、人々の「かたくなさ」、言葉を換えれば「隣れみのなさ」、「心が神の隣れみに生かされていない、死んだように閉ざされている」、人の世のその現実に対して悲しい思いをされたのです。

私達はどうか、神の隣れみに生きているのでしょうか。少し話が極端になりますが、マザー・テレサについて次のような話を聞いたことがあります。マザー・テレサは、インドのコルカタで、道端で死にかかっている人を施設に連れて来て、その人の尊厳を大事に扱って看取ったのです。人が死にかかっている。看取ることが出来たら、必ずその人の傍らに行き、慰め、励ましたそうです。「あなたはかけがえのない命を持っているのだ」、「あなたも神に造られたのだからあなたは尊いのだ」と語るのです。言葉だけでなく、献身的な看取りをもって、そのことを教えました。自分は尊ばれているのだ、ということをもマザー・テレサから初めて聞いた人達は、そこで平安な顔をして死んで行ったそうです。人間の手を越えた世界のことは、彼女は全て神様に委ねていたのでしょう。しかし、ただ生きているその人の存在を、それを最大限に大切にしようとした。イエス様が一生懸命に人々に訴え、教えようとしておられるのは、正にそのこと、隣人に対する、その心ではないかと思えます。

そして私達が問われるのも、恐らくその心ではないでしょうか。皆様のご家族の方や隣人の方との関係はいかがでしょうか。もちろん、私達は、マザー・テレサのような生き方は出来ないでしょう。私自身も、怒りに支配され、それをどうすることも出来ないことがあります。イエス様は、律法の中で最も重要なものは何かと問われて、『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』。これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい』(マタイ 22:37~39)と答えられました。しかし、「神を愛すること」も「隣人を愛すること」も、基本的に難しいのが私達ではないでしょうか。隣人への隣れみに踏み出したいけれど、自我が勝つ、それが私達の現実ではないでしょうか。もし、そうであるなら、この「手のなえた人」だけでなく、私達もまた、魂を癒されなければならないのではないのでしょうか。どうすれば良いのでしょうか。

「エレミヤ 17 章 14 節」に次の御言葉があります。「私をいやしてください。主よ。そうすれば、

私はいえましょう。私をお救いください。そうすれば、私は救われます」(エレミヤ17:14)。つまり、私達は神に癒して頂くしかないのではないのでしょうか。そして、それは、私達が十字架を見上げ続けることだと思ふのです。

何度かご紹介していますが、三浦綾子さんが「我弱ければ～矢嶋楫子伝」という本を書いています。東京の女子学園の創設者である矢嶋楫子。明治期から大正期にかけて、教育者として、社会運動家として、素晴らしい活動をした人です。生来、強い性格の人だったようです。自信もあった。しかし彼女は、教師としての歩始めて間もなく妻子ある男性の子供を生むという過ちを犯します。生涯、その罪に苦しむのです。しかしそのことの故にイエス・キリストによって与えられた「赦し」を骨身に沁み込ませて生きる、生かされるのです。彼女の過ちを責め続けた甥の徳富蘇峰に向かって、後にこのような手紙を書いています。(実際の手紙なのか三浦さんの創作が良く分かりませんが…)。「私に洗礼を授けて下さったタムソン先生は…こう言われました『キリストは、あなたの罪をことごとくその背に負って十字架につかれたのです…あなたの罪をことごとくです。今までの罪は、針でついたほども、あなたにはなくなったのです。あなたはただそのことを心から感謝し、己が救い主はイエスであると心から信じれば救われるのです。救われるためには、いささかの行為も必要としません…決して人間は、自分自身の行為によって嘉せられ、信徒となるではありません。むろん信じた者が、救われた喜びのゆえに、貧しい人を助けたり、病める人を見舞ったりすることは自由ですが』。タムソン先生はこれが福音だと言われました…これほどの大きな罪も、信じるだけで赦して下さるとの神の約束を信じて私は喜んで信じたのです」。彼女は、生涯、自分を義としない。「赦された罪人」として十字架を仰ぎ続けます。そして「赦された者—(赦され続けている者)」としても物を見、人を見、生きて行くのです。その生涯の中で「愛と赦し」の軌跡(足跡)を残して行くのです。

私達が、神の御心、憐れみに生きて行けるように癒される秘訣、それは、私達が十字架によって赦され、憐れまれ、今在るを得ている、という思いを忘れないことではないのでしょうか。私達は、今も「主の赦し、十字架の赦し」の中で生かされているのです。だからこそ、いつもイエス様の十字架を仰がなければならない。十字架の許に立って、私達のために、低く、低く、地のどん底まで下って下さったイエス様の姿に心を砕かれないと願うのです。そこから始めて、願わくは、自らも、神の御心に、憐れみに、生きて行きたいものだと願わされます。